

英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定 および測定に関する実態調査の報告

杉 森 幹 彦

はじめに

- ・他大学における英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標設定
および測定に関する実態調査について
- ・英語習熟度別（レベル別）クラス編成とその実施状況
- ・英語到達度目標の設定とその測定方法
- ・まとめと今後の課題

はじめに

本大学における英語教育では、国際社会の場で通用する英語運用力の養成を一層確実なものにする事を重要な教育目標として掲げ、学部独自の教学理念と専門性との関連を踏まえながら、多様化した学習者のニーズとレベルに応じて、コミュニケーションの総合的な基礎能力および国際レベルで通用する高いレベルの運用力を養成するとともに、異文化・多文化を理解し世界人類の平和と共存に貢献する態度と行動力を養成することを基本方針としている。

日常の言語教育については、言語教育研究センター（2002年度より言語教育センター）が中心となり、全学部統一方針で指導に当たっている。具体的には、入学時に英語プレイスメント・テストを学部単位で実施し、1クラス35名のレベル別クラス編成を行い、英語運用力の到達目標を設定し、その実現に向けて継続的に多大の努力を積み重ねている。週4コマの英語授業を、同一の英語ネイティブスピーカー教員が同一クラスを2コマ、日本人教員が2コマずつ担当する体制を原則としている。目標達成のためには、正課授業、エクステンション・センター、および平成14年度から発足した言語習得センター（CLA）が提供する多様なプログラムによって熱心な指導が行われている。

また、言語教育システム研究室（2001年度末まで）では、この到達目標の達成度を測定するために、統一テストの開発研究を長年にわたり継続的に行ってきた。2001年度後期には、このテスト開発に必要な基礎データを収集する目的で、衣笠キャンパス5学部1回生英語履修生全員を対象にした統一テストを実施するに至った。

本研究報告書は、上記の研究活動の一環として、他大学における統一テストの実施状況と英語クラス編成方式及び到達目標の設定と測定に関する情報を収集し、今後の研究の参考にするために実施した実態調査のデータを分析し、その結果をまとめたものである。

統一テスト実施に際しては国際英検G-TELP日本事務局のご厚意、アンケートによる実態調査については大学英語教育学会（JACET）会員のご協力を得て行う事ができた。ここに心から感謝の意を表す次第である。

なお、1999年度から2000年度にかけて立命館大学経済学部教授の清水裕子氏によって同類の調査（以下「清水実態調査」とする）が実施され、その結果の集計と分析が「4年制大学における英語プレイズメント・テスト実施の現状」として2001年2月に報告されている。調査の標本数は四年制大学の学部単位で200件であった。さらに、2000年10月には、大学英語教育学会（JACET）実態調査委員会によって大学英語教育に関する実態調査（以下「JACET実態調査」とする）が実施され、その結果の集計と分析が「わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究 大学の学部・学科編」として2002年9月に報告されている。調査の標本数は無作為抽出による四大と短大の学部・学科360件であった。この報告書では、「統一テストを実施している場合」の回答に限って、これらごく最近の先行調査データを部分的に比較参照しながら分析を試みることにする。

この研究報告書は、平成14年4月から半年間の学外研究の機会を与えら、その間に行った実態調査をまとめたものである。また、平成14年9月6日に青山学院大学で開催された大学英語教育学会（JACET）平成14年度全国大会において、この研究成果の概要を事例研究として発表したことを付記する。

他大学における英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標設定 および測定に関する実態調査について

平成14年6月に英語統一テストの実施、習熟度別クラス編成、到達目標の設定と測定に関する実態調査を行った。アンケート実施に際しては、大学英語教育学会の各種役員を中心に400名の大学教員を調査対象として協力を依頼した。発送総数400通のうち回収数は208通で、有効回収率は52.0%であった。この場をお借りして、アンケートにご協力頂いた方々に、感謝の意を表します。

表1 アンケートの対象者と回収率

	四年制大学教員	短期大学教員	合計
発送数	347	53	400
回収数	194	14	208
回収率	55.9%	26.2%	52.0%

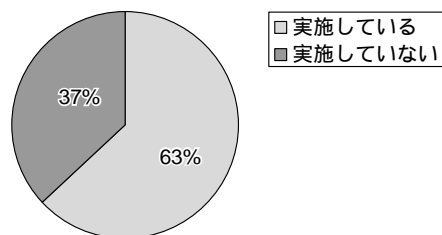
次に調査した質問とその回答集計を紹介し、それぞれの結果について上記の先行調査データを比較参照しながら分析と考察を行うことにする。

1. 英語統一テストの実施について

問B 1～2回生の英語クラスにおいて、何らかの目的で統一テストを実施していますか。

表2 統一テスト実施状況

実施している	131校（63%）
実施していない	77校（37%）



四年制大学と短期大学を合計すると、何らかの目的で英語の統一テストを実施している大学は63%、実施していない大学は37%であった。清水実態調査では統一テストを実施している学部は48.0%（200件中96件）、実施していない学部は52.0%（200件中104件）となっている。英語統一テストの校種別実施状況は、表3の通りである。清水実態調査でも校種別の実施状況はほとんど同様であった。

表3 校種別実施状況

	四大（194校）	短大（14校）	合計（208校）	比率
実施している	125（64%）	6（43%）	131校	63%
実施していない	69（36%）	8（57%）	77校	37%

実施している場合は、次の質問Cの1～10にお答えください。実施していない場合は、Dの1～10にお答えください。

A. 統一テストを実施している場合

2. 統一テストの目的について

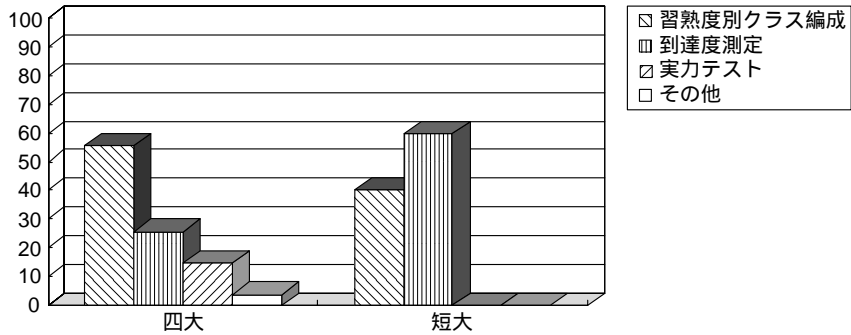
問C 1. 統一テストの目的は

- (1) () 習熟度別（レベル別）クラス編成のため (2) () 到達度測定のため
(3) () 実力テストとして成績評価の一部とするため (4) () その他：

統一テストの実施目的については次のような結果が得られた。

表4 統一テストの校種別目的

	四大	短大
(1) 習熟度別クラス編成のため	55.7%	40.0%
(2) 到達度測定のため	25.7	60.0
(3) 実力テスト（成績評価の一部）	14.8	0.0
(4) その他	3.8	0.0



統一テストの目的は四年制大学では55.7%が習熟度別クラス編成のためのプレイスメント・テストとして、短期大学では60.0%が到達度測定のためであり、習熟度別クラス編成のために実施しているところはやや少なく40.0%である。清水実態調査ではテスト結果の利用方法として調査されているが、四大では64.0%がプレイスメント・テストとして、到達度の測定2.2%に英語力の把握13.5%を加えると、15.7%が到達度測定として統一テストが実施されていることになる。これを今回の調査と比較すると、四大ではここ2年の間に到達度を測定するために統一テストを実施する傾向が強く現れていると考えられる。

3. テストの対象学年について

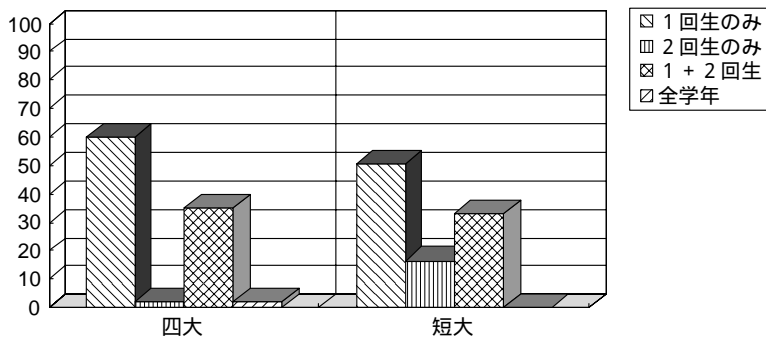
問C2. テストの対象学年は

- (1) () 1回生 (2) () 2回生 (3) () 1回生と2回生

統一テストの実施対象学年は表5の通りであった。

表5 統一テストの対象

	四大	短大
(1) 1回生のみ	60.0%	50.5%
(2) 2回生のみ	2.4	16.7
(3) 1回生と2回生	35.2	33.3
(4) 全学年	2.4	0.0



英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定
および測定に関する実態調査の報告（杉森）

表5から四年制大学短期大学とも、統一テストは大半が1回生のみを対象として実施されているが、1回生と2回生の両学年にわたって実施されているところが33～35%あることが分かる。清水実態調査では四大の1回生のみを実施しているのは72.0%（82件中59件）、1回生と2回生で実施しているところは15%（82件中12件）となっている。

4．実施の規模について

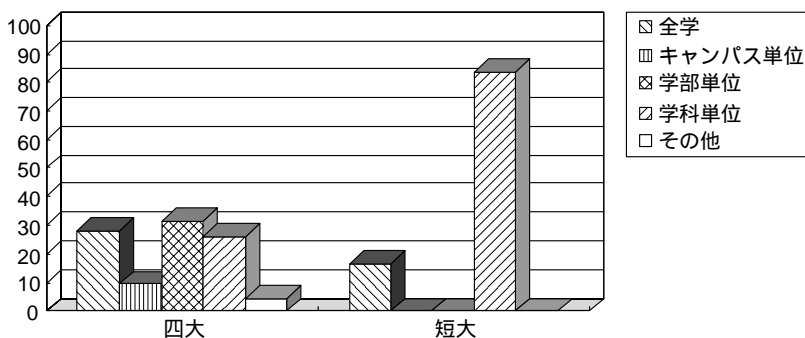
問C3．実施の規模は

- (1) () 全学 (2) () キャンパス単位 (3) () 学部単位
(4) () 学科単位 (5) () その他：

統一テストの実施規模については、次のような結果が得られた。

表6 統一テスト実施の規模

	四大	短大
(1) 全学	28.1%	16.7%
(2) キャンパス単位	9.6	0.0
(3) 学部単位	31.9	0.0
(4) 学科単位	25.9	83.3
(5) その他	4.4	0.0



四年制大学では、学部単位、全学単位、学科単位の順で多く実施されている。短期大学では、80%以上が学科単位で実施されている。

5．実施の回数と時期について

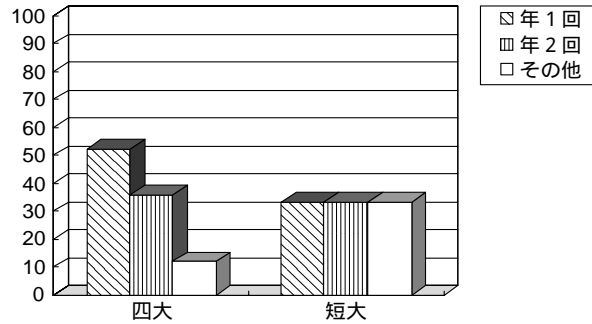
問C4．実施の回数と時期は

- (1) () 年1回 () 月 (2) () 年2回 () 月と () 月
(3) () その他 () 月

統一テスト実施の回数と時期については、表7の通りである。

表7 テスト実施の回数

	四大	短大
(1) 年1回	52.2%	33.3%
(2) 年2回	35.8	33.3%
(3) その他	11.9	33.3%



四年制大学では、年1回の実施が52.2%と最も多く、次に年2回が35.8%となっている。短期大学では、年1回と年2回が共に33.3%であり、四年制大学に比べて年2回実施している短期大学がかなりある。

年1回の場合、前期入学時に実施されるのが全実施校のうち59大学(45%)、年2回実施の場合は、4月と翌年の1月または2月に1年間の学習効果と到達度を測定するために実施しているところが多いようである。清水実態調査では、年1回実施が63.2%、年2回が32.2%であり、年1回の実施時期は72.7%が4月となっている。

6. 使用テストとそのレベルについて

問C5. 使用しているテストとそのレベルは

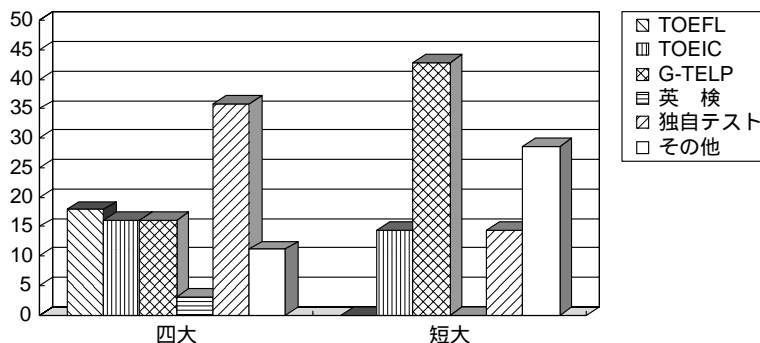
- (1) () TOEFL (TOEFL-ITP, Pre-TOEFL) (2) () TOEIC (TOEIC-IP)
 (3) () G-TELP (Level 4 , 3 , 2 , 1) (4) () 英検 (_____ 級)
 (5) () 自主開発による独自のテスト (レベル _____) (6) () その他

統一テストとして使用しているテストの種類には次のようなものが多かった。

表8 使用テストとそのレベル

	四大	短大
(1) TOEFL (ITP , Pre)	17.9%	0.0%
(2) TOEIC (IP)	16.0	14.3
(3) G-TELP	16.0	42.9
(4) 実用英語技能検定試験	3.1	0.0
(5) 自主開発の独自テスト	35.8	14.3
(6) その他	11.1	28.6

英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定
および測定に関する実態調査の報告（杉森）



四年制大学では、TOEFL、TOEIC、G-TELPがほぼ同数で使用されている。短期大学の場合は、TOEFLはなく、TOEICが14.3%で、G-TELPが42.9%と最も多かった。TOEFLの場合はITP及びPreも含まれている。G-TELPの場合は、レベル2が11校、レベル3が3校、レベル4が8校で使用されていた。実用英語技能検定試験を使用しているところは四年制大学で若干あったが、準二級が4校、二級が2校のみであり、短期大学ではゼロであった。

これら市販テストに比べて、各大学での自主開発による独自テストを実施しているところが、四年制大学では35.8%と第一位となり、短期大学では14.3%でTOEICと同数の第二位となっている。自主開発テストの難易度は四年制大学では英検2級程度が7校あり、短期大学では英検3級または英語の基礎・初級レベルが11校あった。

上記以外の市販テストを使用しているところは、四年制大学では11.1%、短期大学では28.6%で、Cambridge QPT（Quick Placement Testのwritten版）、JACETリスニング・テスト、ミシガンテスト、CELTリスニング・テストなどがあげられている。さらに、四年制大学ではTOEFLまたはTOEICと自主開発による独自テストを併用していることが7校から報告されている。全体では外部の市販テストを採用している四大が64.1%、短大が85.8%、自主開発による独自テストを使用している四大が35.8%、短大が14.3%あることになる。清水実態調査では外部の市販テストを採用している四大は42.2%、自主開発による独自テストを実施しているところは57.8%であり、両方とも約20%の差が見られる。今回の調査では、外部テストのひとつであるG-TELPの採用がここ2年間に急増し、特に短大で約43%も採用されていることが明らかとなった。

7. 市販テストの受験料について

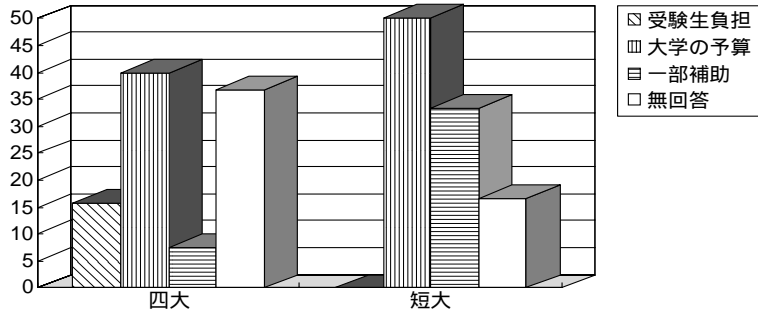
問C6. 市販テスト（5の1～4）を使用する場合の受験料は

- (1) () 毎回受験生から徴収する (2) () 大学または学部・学科の予算で
(3) その他

統一テストに市販テストを使用している場合、その使用料金の負担は次の通りである。

表9 市販テストの受験料

	四大	短大
(1) 受験生から徴収する	15.8%	0.0%
(2) 学部・学科予算で	39.8	50.0
(3) 受験生の一部負担	7.5	33.3
(4) 無回答	36.8	16.7



この調査項目については無回答が四大で36.8%、短大で16.7%と多かったが、何らかの回答を得た四年制大学では、学部・学科予算で負担しているところが39.8%、短期大学では50.0%であった。

受験する学生から全額徴収しているところが四年制大学では15.8%、短期大学では全くなく、学生に一部負担をさせ残りを大学が負担しているところが33.3%であった。

8. テスト問題の領域・スキルについて

問C7. テスト問題の内容・領域・スキルについて、該当するものすべてを選んでください。

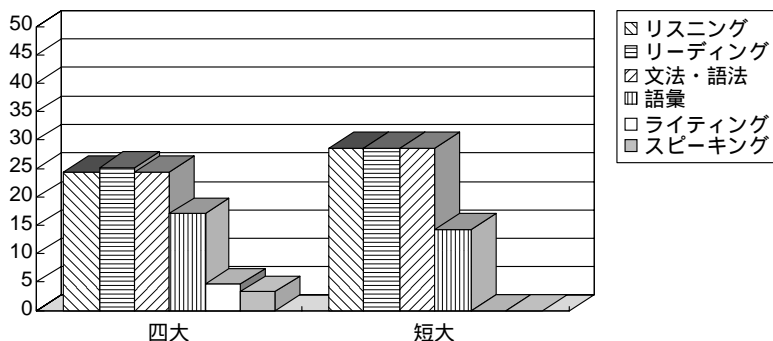
- (1) () リスニング (2) () リーディング (3) () 文法・語法
 (4) () 語彙 (5) () ライティング (6) () スピーキング
 (7) () その他

統一テストで測定しようとするスキルは表10の通りであった。

表10 テストで測定する領域・スキル

	四大	短大
(1) リスニング	24.4%	28.6%
(2) リーディング	25.1	28.6
(3) 文法・語法	24.4	28.6
(4) 語彙	17.1	14.3
(5) ライティング	4.7	0.0
(6) スピーキング	3.3	0.0
(7) その他	0.5	0.0

英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定
および測定に関する実態調査の報告（杉森）



統一テストで測定しようとするスキルは、やはりリスニング、リーディング、文法・語法が中心であり、四年制大学ではそれぞれ共通して約24%、短期大学では約28%を占めている。語彙に関する問題は14～17%にとどまっており、ライティングやスピーキングはほとんど実施されていない。各種統一テストはリスニング、リーディング、文法・語法および語彙の各要素を適宜組み合わせられて作成されているが、統一テストの中には語彙問題やリスニング問題を含まないものもあった。これに反して、リスニングからライティングとスピーキングまで含んだ総合的なテストを実施している大学が若干あった。

9. テストの実施会場について

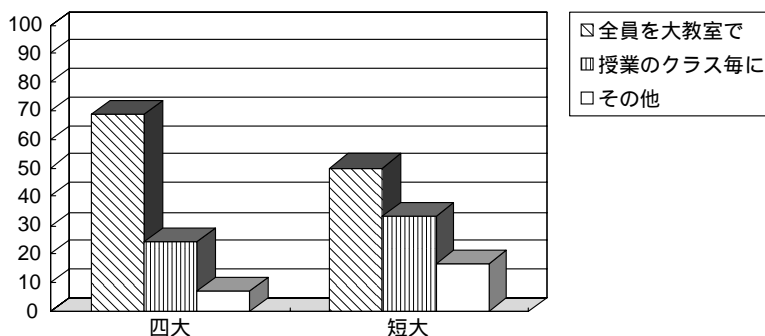
問C 8. 実施会場について

- (1) () 実施は全受験者を集めて1つまたは数室の大教室で行う
 (2) () 授業中に教室でクラス毎に行う (3) () その他

統一テストの実施形態は表11の通りである。

表11 テスト実施形態

	四大	短大
(1) 全受験者を集めて大教室で	68.9%	50.5%
(2) 授業中にクラス毎に教室で	24.4	33.3
(3) その他	6.7	16.7



統一テストの実施形態は表11の通り、四年制大学・短期大学共に半数以上が全員を大教室に集めて行われているが、30%前後の大学では、授業中にクラス単位で通常の教室で実施されている。

10. テストの実施担当者について

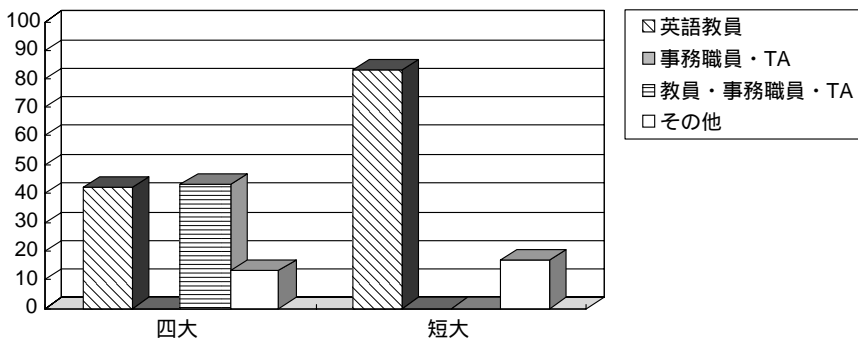
問C9. 実施担当者について

- (1) () 英語教員のみが担当する (2) () 事務職員やTAのみが担当する
 (3) () 事務職員やTAなどの協力を得て英語教員が担当する (4) () その他

統一テストの実施担当者については、四年制大学と短期大学では大きな違いが見られた。

表12 テスト実施担当者

	四大	短大
(1) 英語教員のみ	42.5%	83.3%
(2) 事務職員・TAのみ	0.0	0.0
(3) 英語教員と事務職員・TA	43.3	0.0
(4) その他	13.4	16.7
(5) 無回答	0.8	0.0



四年制大学では、英語教員だけで行っている大学と事務職員の応援を得て実施している大学がほぼ同数で43%であるが、短期大学の場合は83%と殆どが英語教員だけで実施されている。

11. テスト結果のフィードバックについて

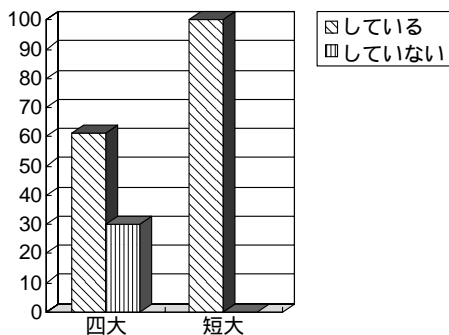
問C10. テスト結果を学生にフィードバックしていますか。

- (1) () フィードバックをしている (2) () フィードバックをしていない

テスト結果のフィードバックについては表13の通りである。

表13 テスト結果のフィードバック

	四大	短大
(1) している	61.1%	100%
(2) していない	30.2	0.0
(3) その他	1.6	0.0
(4) 無回答	7.1	0.0



テスト実施後、その結果を受験者に知らせ、何らかの形でその後の学習に役立つような情報をフィードバックしているかという問いに対して、表13の通り短期大学では「実施している」が100%であった。これに対して四年制大学では、「実施している」が61%、「実施していない」が30%という結果であった。清水実態調査では四大でフィードバックを与えているところは46.2%、与えていないところは53.8%であったと報告されている。このデータから、最近の2年間でテスト結果を受験者にフィードバックする傾向が増加しているが、ひとつの要因として、採用が急増しているG-TELPの場合は、受験者に情報量のかかなり多い個人別スコアレポートが返却されるためであると考えられる。

・英語習熟度別（レベル別）クラス編成とその実施状況

日本の大学における英語習熟度別クラス編成の実施状況と、到達目標の設定及び測定方法についての調査結果を報告する。

1. 英語習熟度別クラス編成の実施状況について

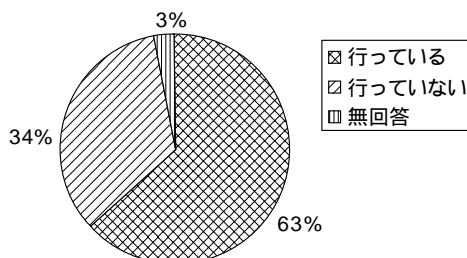
問E 1. 英語習熟度別（レベル別）クラス編成を行っていますか。

- (1) () 行っている (2) () 行っていない

習熟度別クラス編成の実施については、表14の通りである。

表14 習熟度別クラス編成の実施（1）

(1) 行っている	63.0%
(2) 行っていない	34.1
(3) 無回答	2.9

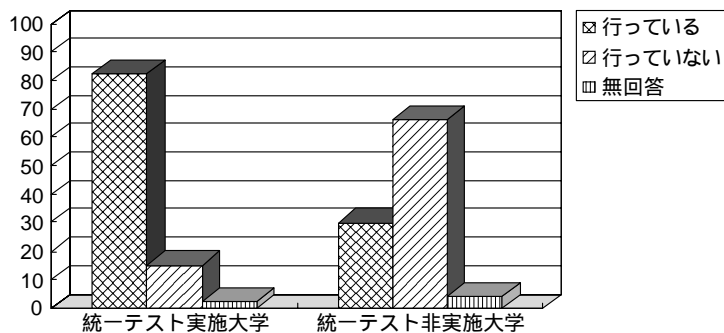


今回のアンケートの全回答者208名を対象に、各大学における英語習熟度別クラス編成の実施状況を調査した結果、表14に見られるように、四年制大学と短期大学を合わせて63%の大学で習熟度別クラス編成を行っていることが分かった。ところが、JACET実態調査では「全部が習熟度別」とする学部・学科が7.5%（360件中27件）と「一部で設定している」学部・学科が26.9%（360件中97件）を合計すると、34.4%（360件中124件）が習熟度別授業を実施していると報告されている。この違いは、ここ数年の間に英語の習熟度別クラス編成が加速度的に実施されつつあることを示していると考えられる。

これを統一テストを実施している大学と実施していない大学に分けて比較してみると、表15の様なデータが得られた。

表15 習熟度別クラス編成の実施（2）

	統一テスト実施大学	統一テスト非実施大学
(1) 行っている	82.4%	29.9%
(2) 行っていない	15.3	66.2
(3) 無回答	2.3	3.9



統一テストを実施している大学では、その目的が主として習熟度別クラス編成を行うためであるので当然であると言えるが、統一テストを実施していない大学においても、約30%の大学では習熟度別クラス編成を行っていることが明らかとなった。

2 習熟度別クラス編成の方法について

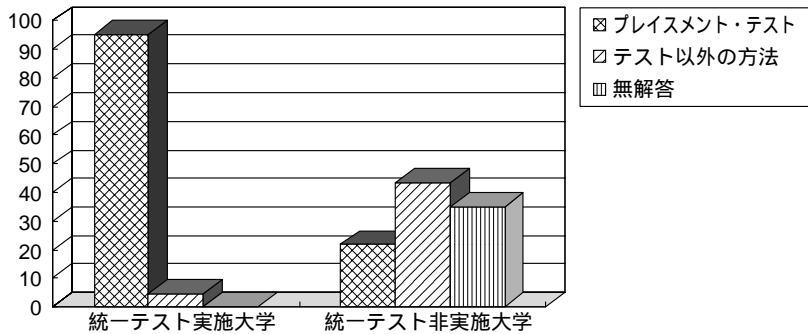
問 E 2 . 行っている場合の方法は

- (1) () プレイメント・テストによる
- (2) () テスト以外の方法で

習熟度別クラス編成の方法について、統一テスト実施大学と実施していない大学に分けて調べて見ると、表16の通りであった。

表16 習熟度別クラス編成の方法

	統一テスト実施大学	統一テスト非実施大学
(1) プレイメント・テストによる	95.4%	21.7%
(2) テスト以外の方法で	4.6	43.5
(3) 無回答		34.8



統一テストを実施していない大学で、習熟度別クラス編成を行う方法として、プレイメント・テストが21.7%となっているが、これは統一テストではない別のテスト方式で行っているものと推測される。さらに、テスト以外の方法で行っていると回答した大学が43.5%あるが、その具体的な方法は述べられていない。

英語到達度目標の設定とその測定方法

次に、英語学習の到達度目標の設定とその到達度の測定方法について調査した。結果の集計は次の通りである。

1. 到達度目標の設定状況について

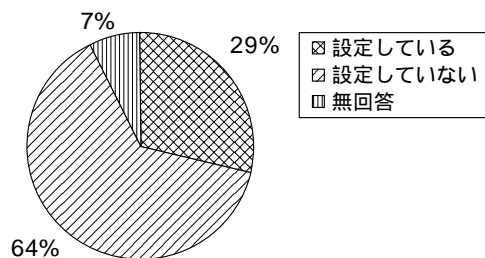
問F1. 英語の到達目標を設定していますか

- (1) () 設定している (2) () 設定していない

到達目標の設定状況は表17の通りである。

表17 到達目標の設定状況（1）

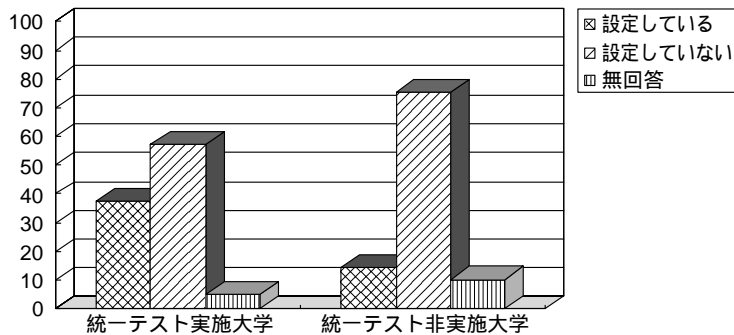
(1) 設定している	28.9%
(2) 設定していない	63.9
(3) 無回答	7.2



このデータから明らかなように、到達目標を設定している大学は、調査時点ではまだ30%以下である。これを統一テストを実施している大学と実施していない大学に分けて比較すると、表18の通りである。

表18 到達目標の設定状況（2）

	統一テスト実施大学	統一テスト非実施大学
(1) 設定している	37.4%	14.3%
(2) 設定していない	57.3	75.3
(3) 無回答	5.3	10.4



統一テストを実施していない大学の中にも、到達目標を設定している大学が14.3%あるといえる。また、JACET実態調査では、外国語教育の目標を設定している学部・学科が72.2% (360件中260件) あり、同列には論じられないが、1982年の調査の7.6%に比べると大きく前進したことが認められている。因みに大学の種類によって設定率の高い順位を並べてみると、女子四大 (79.2%)、共学四大 (75.6%)、女子短大 (68.5%)、共学短大 (64.5%) となっている。設立者別では国立大学が81.4%と最も高く、私立大学が71.8%、公立大学が66.7%と報告されている。

2. 設定された到達目標例について

問F 2. 支障がなければ、到達目標についてお答えください。

- (1) () TOEFL (TOEFL-ITP) _____点
- (2) () TOEIC (TOEIC-IP) _____点
- (3) () G-TELP (Level _____)
- (4) () 英検 (_____ 級)
- (5) () その他 : _____

到達目標として報告された具体的な指標は次の通りである。

- (1) TOEFL (ITP) : 400 , 450 , 475 , 480 , 500 , 520 , 530 , 550
- (2) TOEIC (IP) : 350 , 400 , 500 , 530 , 550 , 600 , 650 , 700 , 730 , 800 , 850 , 900

- (3) G-TELP : level 1 , 2 , 3
- (4) 英検 : 準 2 級 , 2 級 , 準 1 級 , 1 級
- (5) その他 : 工業英検 4 級 , 2000 Productive vocabulary

3 . 到達度測定の実施状況について

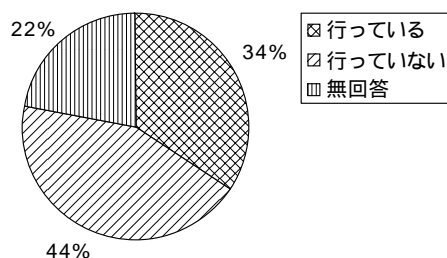
問 F 3 . 英語到達度の測定を行っていますか。

- (1) () 行っている (2) () 行っていない

到達度目標を掲げている大学において、到達度測定を行っているかどうかを調査した結果は、表19の通りである。

表19 到達度測定の実施状況（1）

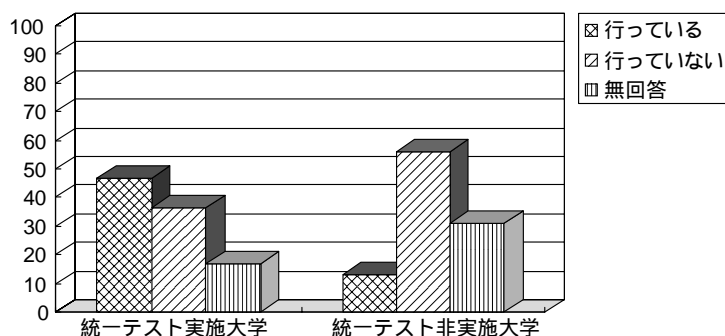
(1) 行っている	34.1%
(2) 行っていない	43.8
(3) 無解答	22.1



到達度目標を設定している大学は30%弱であるが、その内、到達度を測定している大学は34%、測定していない大学は43.8%である。これを統一テスト実施校と非実施校に分けて比較してみると、表20の通りである。

表20 到達度測定の実施状況（2）

	統一テスト実施大学	統一テスト非実施大学
(1) 行っている	46.6%	13.0%
(2) 行っていない	36.6	55.8
(3) 無回答	16.8	31.2



統一テストを実施している大学でも、到達度を測定していない大学が36.6%あり、テストを実施していない大学でも、13.0%と僅かではあるが到達度の測定を行っているところがある。

4 . 到達度測定の方法について

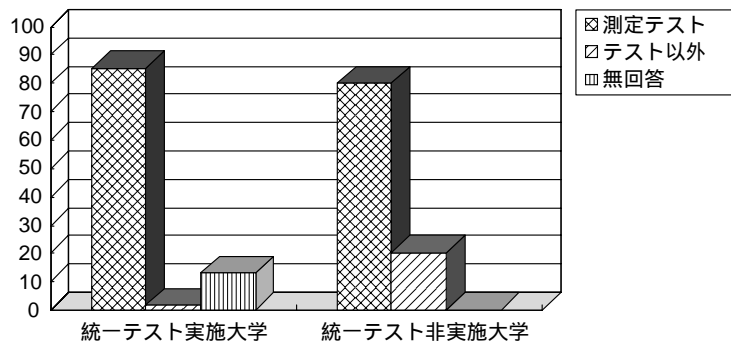
問 F 4 . 行っている場合の方法は

- (1) () 到達度測定テストによる (2) () テスト以外の方法で

到達度の測定方法について、統一テスト実施校と非実施校に分けて比較した結果は、表21の通りである。

表21 到達度の測定方法

	統一テスト実施大学	統一テスト非実施大学
(1) 測定テストによる	85.2%	80.0%
(2) テスト以外の方法で	1.6	20.0
(3) 無回答	13.1	0.0



統一テストを実施している大学では、85.2%がテストによって到達度の測定を行っているのは当然であると言えるが、統一テストを実施していない大学で13%の大学が到達目標を設定しており、そのうちの80%が到達目標の測定を何らかのテストを用いて行っていることが分かった。

B . 統一テストを実施していない場合

「統一テストを実施していない」と答えた大学は、四年制大学では回答のあった194校のうち69校（36%）、短期大学では14校のうち8校（57%）であった。

次に、「統一テストを実施していない」と答えた大学について、その理由と過去における実施の有無、あるいは将来の実施計画などについて調査したので、以下にそのデータの集計と分析を行う。

1 . 統一テストを実施していない理由

統一テストを実施していない理由として自由記述式で書かれた内容を要約すると、次の9項目になる。

- (1) 教員間の意見の不統一・無関心 20校

英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定
および測定に関する実態調査の報告（杉森）

- (2) 必要性が認められない・学力低下・学力差僅少 12
- (3) 必要な設備・予算措置がない 8
- (4) 実施に必要な全学的協力体制が組めない 6
- (5) 日程的に実施する時間がない 4
- (6) 学生数が多いため実施・処理が不可能 3
- (7) テスト作成に要する労力・やる気がない 3
- (8) 学生の心理的負担が多くなる 3
- (9) 特になし 35

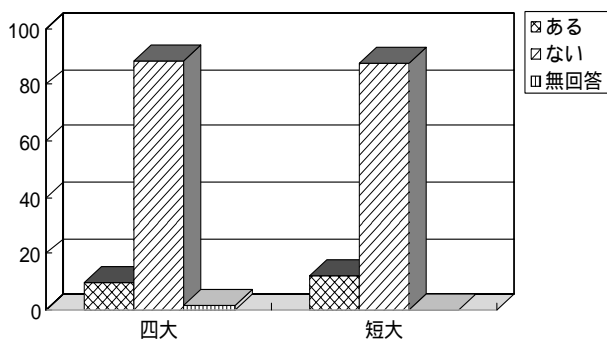
統一テストを実施していない、または実施できない最大の理由は、学力の低下、学力差の僅少性、教育目標と市販テストとの整合性等に対する教員の様々な意見や、到達度の測定は担当教員自身で行うべき性質のものであるなど、教員間の多様な意見の不一致と無関心さが指摘されている。さらに、大学によっては、統一テスト実施に伴う物理的な理由として、必要な設備・予算措置・事務職員を含む全学的な協力体制・オリエンテーションや授業と関連するスケジュール・事後処理・テストの自主作成時間と熱意・学生への心理的影響など、いずれも教育現場で直面する問題や困難性が挙げられている。

2. 過去における統一テスト実施の有無

現在統一テストを実施していない大学で、過去に実施したことがあるかどうかを調べてみると、表22の通り90%近くが実施経験のないことが分かった。

表22 統一テストの実施経験

	四大	短大
(1) ある	10.1%	12.5%
(2) ない	88.4	87.5
(3) 無回答	1.4	0.0

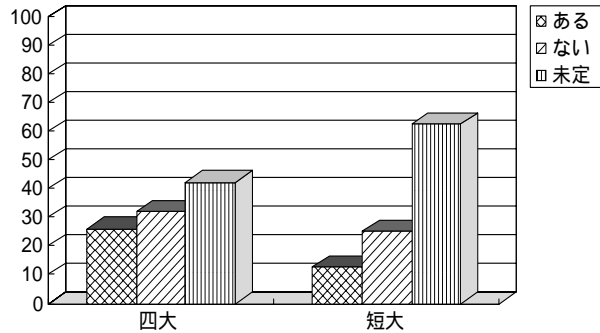


3. 将来における実施計画

現在は実施していないが、将来統一テストを実施する計画があるかどうかを調べてみると、表23のように「未定」と答えた大学が四年制大学では42%、短期大学では62.5%であった。しかし、中には将来実施を考えている大学が四年制大学では26.1%、短期大学では12.5%あり、「未定」と答えた大学の中で将来実施する方向で検討している可能性を含むと、今後統一テストを実施する大学が徐々に増加するものと予想される。

表23 統一テストの実施計画

	四大	短大
(1) ある	26.1%	12.5%
(2) ない	31.9	25.0
(3) 無回答	42.0	62.5

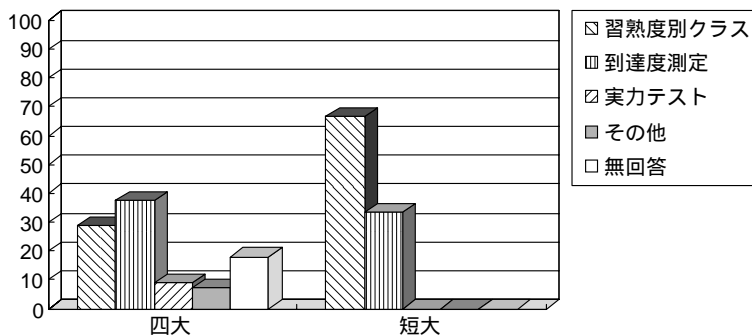


4. 将来実施する場合の目的

「将来実施する計画あり」と「未定」と回答した大学に対して、実施する場合の目的を調査したところ、表24のような結果となった。

表24 将来統一テスト実施の目的

	四大	短大
(1) 習熟度別クラス編成	28.6%	66.7%
(2) 到達度測定	37.5	33.3
(3) 実力テストとして	8.9	0.0
(4) その他	7.1	0.0
(5) 無回答	17.9	0.0



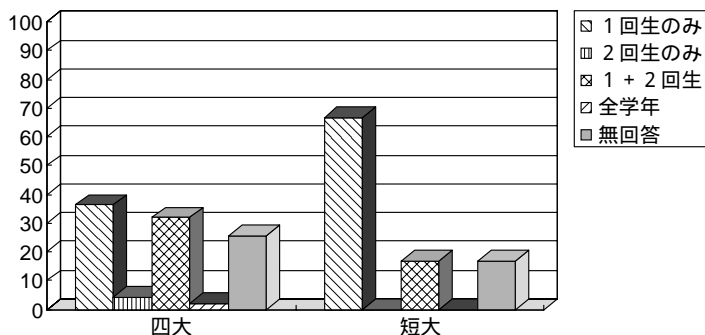
現在実施している大学の統一テストの目的は、四年制大学では習熟度別クラス編成のためのプレイズメント・テストが最も多かったが、「将来実施する計画あり」と「未定」と答えた大学では、到達度測定を目的とする大学が習熟度別クラス編成を目的とする大学より約9%多くなっている。短期大学では習熟度別クラス編成を目的とする大学が到達度測定を目的とする大学の2倍多くなっている。このデータから、これからの課題として、四年制大学では到達度測定、短期大学では習熟度別クラス編成のためのテストが必要であると考えられる。

5. テストの対象学年

「将来実施する計画あり」と「未定」と答えた大学の統一テストの対象学年は、表25の通り四年制大学では1回生のみが36.2%、1, 2回生が31.9%と多く、短期大学では1回生のみが66.7%と最も多い数値を示している。これは現在実施している大学の場合と同じ順位である。

表25 将来統一テスト実施の対象学年

	四大	短大
(1) 1回生のみ	36.2%	66.7%
(2) 2回生のみ	4.3	0.0
(3) 1回生と2回生	31.9	16.7
(4) 全学年	2.1	0.0
(5) 無回答	25.5	16.7

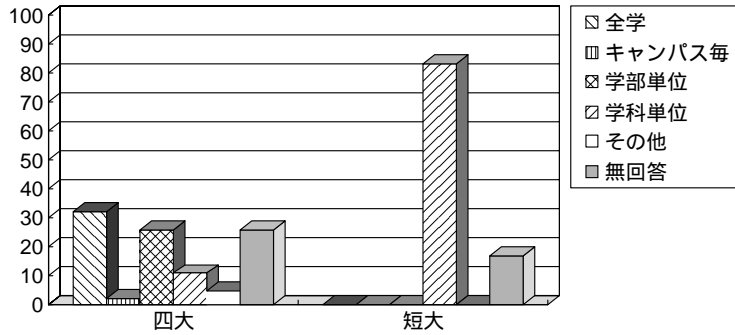


6. テスト実施の規模

「将来実施する計画あり」と「未定」と答えた大学の統一テスト実施の規模は、表26の通り現在実施している大学の場合と同様である。

表26 将来統一テストを実施する規模

	四大	短大
(1) 全学	31.9%	0.0
(2) キャンパス単位	2.1	0.0
(3) 学部単位	25.5	0.0
(4) 学科単位	10.6	83.3
(5) その他	4.3	0.0
(6) 無回答	25.5	16.7

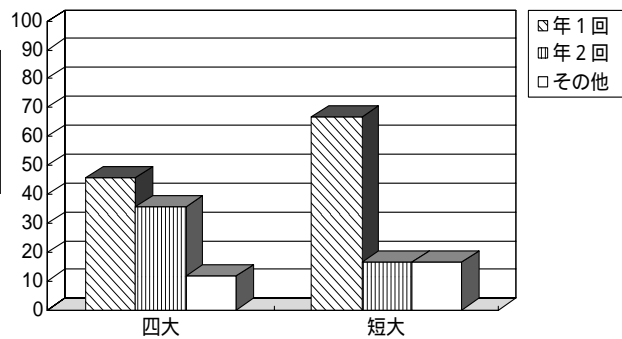


7. 実施の回数と時期

「将来実施する計画あり」と「未定」と答えた大学における統一テスト実施の回数と時期については、現在実施している大学の場合と殆ど同様であるが、短期大学の場合は年1回に集中するようである。実施の時期については、年2回の場合は4月と10月、または4月と9月が予定されている場合が多かった。

表27 将来統一テストを実施する回数

	四大	短大
(1) 年1回	45.8%	66.7%
(2) 年2回	35.8	16.7
(3) その他	11.9	16.7



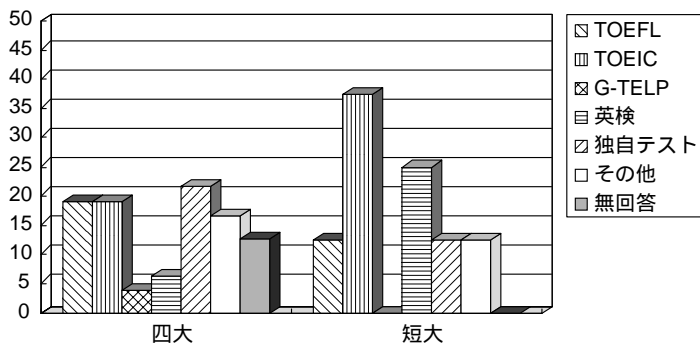
8. 将来使用したいテストの種類

「将来実施する計画あり」と「未定」と答えた大学で統一テストとして使用したいテストは表28の通りである。

表28 将来使用したいテストの種類

	四大	短大
(1) TOEFL (ITP, Pre)	19.2%	12.5%
(2) TOEIC (IP)	19.2	37.5
(3) G-TELP	3.8	0.0
(4) 実用英語技能検定試験	6.4	25.0
(5) 自主開発による独自テスト	21.8	12.5
(6) その他	16.7	12.5
(7) 無回答	12.8	0.0

英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定
および測定に関する実態調査の報告（杉森）



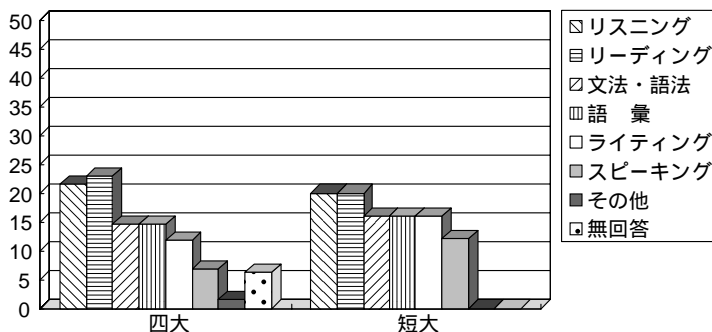
将来実施を計画している大学では、特に短期大学の場合、市販テストのG-TELPがまだあまり知られていないようである。短期大学ではTOEICまたは英検のいずれかを統一テストとして使用することを考えているところが多いようである。この場合も自主開発による独自テストと市販テストとの併用を計画しているようである。テストのレベルとしては、G-TELPはレベル2、英検は2級、自主開発による独自テストは初級レベルを考えている。その他のテストとしては、JACET英語基礎聴解力標準テスト、センター試験などが挙げられている。

9. 将来実施したいテスト問題の領域・スキル

「将来実施する計画あり」と「未定」と答えた大学で、将来実施する場合の統一テストの領域・スキルを表29のように考えているようである。

表29 将来実施したいテスト問題の領域・スキル

	四大	短大
(1) リスニング	21.5%	20.0%
(2) リーディング	22.9	20.0
(3) 文法・語法	14.6	16.0
(4) 語彙	14.6	16.0
(5) ライティング	11.8	16.0
(6) スピーキング	6.9	12.0
(7) その他	1.4	0.0
(8) 無回答	6.3	0.0



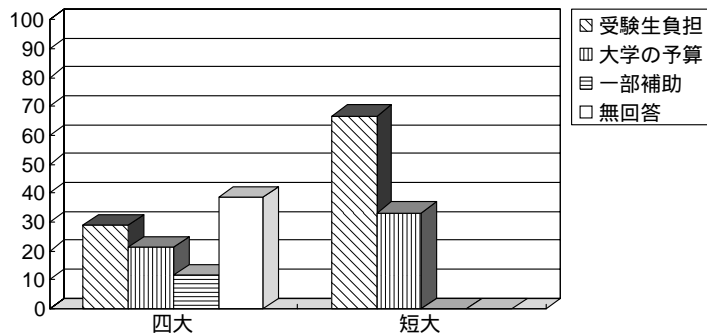
これを現在実施している大学の場合と比較してみると、これから実施したい統一テストでは、リスニングとリーディングの他に、スピーキングとライティング、そして文法・語法・語彙を含む総合的な運用能力の測定がより重要であるとの考えが窺える。

10 . 市販テストの受験料

将来市販テストを統一テストとして使用する場合、受験料の負担については表30のような方法が考えられている。

表30 将来市販テスト使用の受験料負担方法

	四大	短大
(1) 受験生から徴収	28.8%	66.7%
(2) 学部・学科の予算で	21.2	33.3
(3) 受験生の一部負担	11.5	0.0
(4) 無回答	38.5	0.0



現在実施している大学の場合と比較すると、特に短期大学において将来実施する場合は、受験料は学生に全額負担させるという考えが大きくクローズアップされている。

まとめと今後の課題

アンケートによる実態調査の集計とデータ分析から得られた要点を、今後の課題を含めて次の12項目にまとめることにする。

- 1 . 英語統一テストは回答者の63%が何らかの形で実施している。さらに、将来における実施希望を含めると72%におよぶことになる。
- 2 . 統一テストの主な目的は、習熟度別クラス編成と到達度測定である。四大ではここ2年の間に到達度を測定するために統一テストを実施する傾向が見られる。この目的に使用する各種テストの選択が極めて重要である。
- 3 . 統一テストには、四年制大学では独自開発テストが36%、短期大学ではG-TELPが43%を

英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定
および測定に関する実態調査の報告（杉森）

占めていることが判明した。

- 4．統一テストの自主開発には、テスト理論に基づいた妥当性と信頼性の高いテスト開発が望まれる。そのためには、組織的な開発プロジェクトとその支援体制が必要である。
- 5．ライティングとスピーキングについては殆どテストされていないので、コミュニケーションの能力を測定するためには今後の開発と実施方法の研究が必要である。「将来の実施を検討」と「未定」の回答者には、ライティングとスピーキングを含めた総合的な運用力を測定するテストが考えられているようである。
- 6．テスト結果のフィードバックを行っているのは61%であるが、受験者にはスコアだけではなく、診断情報を含むデータを提供することが望まれる。
- 7．統一テストを実施していないのは回答者の37%であるが、その主な理由には次のようなものがある。
 - (1) 全学的に共通理解が得られない
 - (2) 必要がない
 - (3) 実施に必要な予算・日程・担当体制・場所や設備など物理的な条件が整備されていない。
 - (4) 関係者にその情熱とゆとりがない。
 - (5) 学生に与える心理的な問題が懸念される。
- 8．到達目標は64%が設定されていない。目標を設定していない大学では、教材の選択、指導法の展開、成績評価などは何を基準に行われているのであろう。
- 9．到達目標を設定している場合でも、到達度を測定していない場合が約半数ある。教育内容と成果の質的かつ量的アカウントビリティが必要である。
- 10．英語習熟度別クラス編成を実施している大学は四大と短大を合わせると63%であった。JACET実態調査と比較すると、ここ数年の間に習熟度別クラス編成が加速度的に増加している。
- 11．この調査の時点では実施していないが、将来、統一テストを実施する計画があると回答した大学は、四大で26.1%、短大で12.5%であった。「未定」の回答が半数近くあったがその中には実施する方向で検討している大学もある。
- 12．これからは学習者の多様な要因に可能な限り対応し、目標達成の喜びと自信を与えるための教育条件を整備し、教員の高い指導力と努力と情熱によって、学生がそれぞれの学習環境で自ら学ぶ学習意欲を高め、潜在的能力を活性化させるための教育が求められている。

今回のアンケートにご協力頂きました大学英語教育学会の会員諸氏に心から感謝の意を表します。有り難うございました。

2003年1月

E-mail : sugimori@sps.ritsumei.ac.jp

参考文献

- 大学「一般英語」教育実態調査研究会、1983 . 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(1)
教員の立場 』
- 大学英語教育学会実態調査委員会、1990 . 『我が国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』大学
英語教育学会
- 清水裕子、2001 . 『4 年制大学における英語プレイスメント・テスト実施の現状』立命館大学経済学部
- 大学英語教育学会実態調査委員会、2002 . 『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究 大学
の学部・学科編 』大学英語教育学会